

第2章 地域福祉活動の現状と課題



1 地域福祉活動の現状

近年、少子高齢化、人口減少、核家族化を背景に、人と人とのつながりがより希薄化する中で、社会的孤立、生活困窮、ひきこもり、虐待、ヤングケアラーなど、地域の福祉課題も複合化・複雑化しています。

また、新型コロナウイルス感染症の影響が長期化する中で、地域の通いの場などの活動の中止や不要不急の外出の自粛により、生活が不活発な状態が続き、フレイル(虚弱)や認知症などが進行することも少なくありません。見守りが必要な人の増加など、地域の福祉課題が徐々に拡大しています。

これらの地域の福祉課題の解決は、公的サービスの充実だけでは困難であり、地域の中での住民同士のつながりを再構築する地域共生社会^(注3)の実現が不可欠です。

一方、住民の中には、ボランティア活動に関心を持つ人や仕事の第一線を終えられた人が、地域に貢献できる活動に参加したいと望む人も増えています。

しかし、これらの人が地域福祉活動の担い手につながっているわけではなく、人材の不足が解消されているわけではありません。

これらのことから、このまま地域の福祉課題を放置しておく場合と、今後地域福祉活動を進展させた場合とでは、将来のまちづくりが大きく違ってくると予想します。次ページにこの二つの場合を比較する図をまとめました。

(注3) 地域共生社会

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会のこと。

(2017(平成29)年2月7日 厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部決定より)



私たちの暮らす「まち」は



不安や課題を
そのまま放置しておけば …

地域の中での
不安や課題

若い世代は、福祉課題に気がつく機会が少ないため、現状を知らせないと協力者は増えない。結局、一部の人だけが踏ん張って活動し続けることになってしまう。将来的には活動がしぼんでいく …

若い世代の力を借りたいけど、若い世代の人にそういうことをお願いしてもいいかわからない。知り合うきっかけが少ないし …

せっかく気持ちがあっても活かせるところがない。地域の中に活躍できる場がないまま日々が過ぎてしまう …

退職後は、地域と関わる生活がしたい！私にどんなことができるのだろうか …

お手伝いしたい気持ちを持つ人は増えても、手助けがほしい人には、うまく結びつかない …

特別なことはできないけれども、ちょっとしたお手伝いならできる。この気持ちを誰に伝えたらいいのかわからない …

地域の課題を解決できるかもしれないのに、企業の地域の一員として貢献したいという気持ちを活かさない …

SDGsについてあちこちで耳にするし、企業として社会貢献をしたいけれども、どんなことをしたら良いだろう …

ひとり暮らし世帯が増えていく中、近所に異変をキャッチし、防ぐ人がいなければ、ますます気がかりな高齢者が増えてしまう …

近所にひとり暮らしや高齢者だけの世帯が多くなった。孤立の問題や消費者被害にあったり、災害の時は心配 …

災害時や緊急時に困っていることに気がつかない。安否確認、避難生活での助け合いが進まない …

近所に目の不自由な人が暮らしているんだけど、どうやって関わったらいいんだろう …

教わる機会が無いと、アクセスができない。うまく使いこなせないと、情報の格差だけでなくつながりにも格差が生じてしまう …

最近、オンラインを使ったやりとりが増えてきているみたいだけど、使い方がよく分からないから誰か教えてくれないかな …

何か困りごとがあっても、誰に相談すればいいのかわからず、自分だけで抱え込んでしまう。他人からの優しさやぬくもりを実感できず、孤立してしまう人が増える …

ちょっとしたことなんだけど、自分の話を聞いてもらったり、不安な気持ちを分かち合える場所がほしい。身近な地域にいつでも気軽に集まれる場所があるといいなあ …

子育てがストレスになり、孤立していく親が増え、子どもへの虐待が増加する …

子育てはわからないことばかり。身近に相談できる人や仲間がいるとありがたいんだけど …

外出や集まりが制限され、高齢者は認知症や寝たきり状態に陥りやすくなる。また、集う機会が少なくなり、困りごとがあっても相談できず、さらに閉じこもりがちになってしまう …

コロナウイルスが怖くて、外出やお出かけができなくなって、友達とのつながりも減ってしまった。これから新しいつながりをつくるのも、どうしたら良いのだろうか …



地域福祉活動を 進めていくと・・・

地元での福祉課題に気がつく若い世代が増え、理解者、協力者も増える。そして地域福祉活動が活発になる！

地域で活躍できるきっかけが生まれ、日頃のつながりやコミュニケーションも進む！

手助けを求める人とお手伝いしたい人をコーディネートすることができ、助け合いや支え合いが活発な地域になる！

企業が社会の中で力を発揮できるようになり、地域での課題解決にむけて、継続的な取り組みにつながっていく！

近所の人たちによるコミュニケーションが増え、気がかりな高齢者が減る！

ふだんからの関わりを持っているので、災害時や緊急時の対応もスムーズになる！

うまく使いこなすことで、手軽に必要な情報が得られたり、新たな出会いにもつながっていく！

困りごとをいち早くキャッチできたり、新しい出会い、発見、交流が進み、支え合いに発展する機会が増える！

相談やつながりの機会が増えるとともに、地域の宝として子どもを育て、見守ろうという気運が生まれる。子どもの健全な育成に関わる人が増える！

感染症対策に配慮した新たなつながりの方法を広め、各地で実践していくことで、これまでのつながりを絶やさない！

地域福祉活動として、現在、このような取り組みが進められています

(例)

- 声をかけあう
「見守り活動」
- 世代をこえたつながりを築く
「世代間交流」
- 共に生きる力を育む
「障がい理解のための啓発」
- 助け合いの心を育む
「子ども福祉委員」(P22参照)
- 気軽な交流と相談を促す
「ふらっとベル」(P28、29参照)
- 地域福祉活動の輪を広げる
「地域福祉活動発表会」(P30参照)

第4次地域福祉活動計画では、
地域福祉活動をより強化するために、「18の取り組み」を進めます
くわしい内容は、この計画のP20
以降をご覧ください



2 今回抽出した課題及びニーズ

第4次活動計画の作成にあたって、既存の調査結果と関係機関・団体へのヒアリングや懇談会で課題及びニーズを抽出しました。

また、第3次活動計画の策定から引き続き取り組む必要がある課題も残されています。ここから得た課題やニーズを下記のようにまとめました。

(1) 集える場づくり

身近な地域で外へ出るきっかけとして「場」は重要な役割を果たしています。

地域への貢献、生きがいを求める「活動の場」、安心して過ごせる「居心地の良い場」、ちょっとした困りごとの相談や、多くの人と交流できる「相談、仲間づくりの場」が求められています。

ここでいう「場」とはハード面だけでなく、人と人とのつながりや心のよりどころとなるソフト面の意味合いも含まれています。

【今回見つけた声】

- 誰もが気軽に立ち寄れ、ちょっとした困りごとを話せる場や同じ立場の人と知り合える場が少ない(高齢者、子ども・子育て分野)
- 新型コロナウイルス感染症の長期化で、活動や交流の場が中止や延期になり、人との出合いやつながりの機会が少なくなっている(高齢者、障がい者、地域福祉分野)
- 障がいがある人たちにとってのサードプレイス(自宅、学校、職場、福祉サービス事業所ではない「第3の居場所」)が必要。特に、文化芸術の分野で選択肢が少ない(障がい者分野)

【第3次活動計画からの継続課題】

- 分野別や目的別、対象別のつどいの場はあるが、気軽に立ち寄れる場が求められている(高齢者、障がい者、子ども・子育て、地域福祉分野)

(2) 担い手づくり

地域福祉活動を進めるためには、「人」の力は欠かせません。見守り活動も、福祉委員活動も、ボランティア活動も「人」で支えられています。しかし、地域福祉活動を進めていく上では人材不足という課題があり、新たな活動者の発掘が求められています。

地域福祉活動に関わる人材の発掘においては、その活動に関心をもってもらうための仕掛けを作ることや、人と人、人と場を的確に結ぶために、コーディネーションの手法を身に付けた人、ちょっとした困りごとの受け止めや橋渡し、仲間づくりなどができる人の育成が求められています。

【今回見つけた声】

- 障がいがある人をはじめ、多種多様な人々への理解を地域全体に広める必要がある(障がい者、地域福祉分野)
- 子どもの主体性を育む機会が少ない(子ども・子育て、障がい者分野)
- ライフステージが変わるごとに福祉への理解を深めていく機会が必要である(子ども・子育て、地域福祉分野)
- 福祉委員活動の役割と活動への理解が地域で十分に広がっていない(地域福祉分野)
- 地域福祉活動の楽しさややりがい次世代の人たちに伝わっていない(地域福祉分野)

【第3次活動計画から継続課題】

- ちょっとした手助けをしてくれる地域の人やボランティアのコーディネートが地区でできていない(高齢者分野)
- 地域福祉活動への協力者の発掘が十分ではない(地域福祉分野)
- 役員の高齢化が進み、個々人の負担が増している(高齢者分野)

(3) つながりづくり

地域福祉活動は、住民同士のつながり、孤立している人への支援、組織間・関係者間の連携、障がいがある人への関わり、近隣での助け合い、子どもの成長に対する支援などの「つながりづくり」も期待されています。特に新型コロナウイルス感染症の影響による自粛で「つながり」のあり方が大きく変わりました。これらをカバーする地域福祉活動の支援体制も求められています。

【今回見つけた声】

- コロナ下での人と人とのつながりを改めてつなぎなおす必要がある(高齢者、地域福祉分野)多様な人たちや世代間をこえた人たちとの出会いや交流の機会が少ない(障がい者、高齢者分野)
- 企業や社会福祉法人の社会貢献の意識と地域の福祉ニーズがまだ十分に結びついていない(地域福祉分野)
- 地域にちょっとした困りごとの受け止めや橋渡し、仲間づくりができる人材が少ない(高齢者、地域福祉分野)

【第3次活動計画からの主な課題】

- 住民同士で互助の力を高めることが必要である(高齢者分野)
- 企業や社会福祉法人なども地域の一員として、地域に貢献できることがあることをもっと知らせていく必要がある(地域福祉分野)
- SOSを発信しやすい環境づくりがまだ十分ではない(高齢者分野)

(4) 情報発信・情報共有

人と人、人と場がつながるために必要なのが情報です。地域福祉活動に関する情報の共有、周知を継続的に行い、意識啓発につなげることが必要です。

また、情報格差が生まれないように、あらゆる世代の人に向けていろいろな手段を用いて的確に情報を伝える工夫が必要です。

【今回見つけた声】

- 子ども達が、自分が住む地域のことについて考える機会が少ない(子ども・子育て分野)
- 情報にうまくアクセスできず、情報にたどりつけない人がいる(高齢者分野)
- 集う場などに参加しにくい人もつながりがもてるツールがあるとよい(高齢者、地域福祉分野)
- 福祉委員の役割と活動の理解が、地域全体に十分広く伝わっているとはいえない(高齢者、地域福祉分野)

【第3次活動計画からの主な課題】

- 必要な人に必要な情報が伝わらない(高齢者、障がい者、子ども・子育て分野)
- 地域活動を知らない人にとっては地区社協の活動内容がわかりにくい、イメージしにくい(地域福祉分野)

(5) 地域での生活支援

人々が、いつまでもいきいきと暮らせる場をつくるためには、身近な地域での相談、日常生活の支援、災害時の支援など、互いに支え合える関係づくりが必要です。

住民ひとり一人が、さまざまな問題を他人事ではなく<我が事>としてとらえ、<丸ごと>受け止める、共に生きる地域社会づくりが求められています。

【今回見つけた声】

- 複合化・複雑化した地域の課題を抱えている家族が増えていて、支援が困難になっている(貧困、孤立、介護など)(高齢者分野)
- 避難行動要支援者名簿があってもうまく共有できているとはいえない(障がい者分野)

【第3次活動計画からの主な課題】

- 防災について、防災組織と地域福祉関係者と自治組織の間で、地域の状況に合わせた一体的な活動になっていない(地域福祉分野)
- 災害対応で予測される問題や課題について十分共有されていない(地域福祉分野)